ＡＩＧ富士生命

Hello! FUJISEI

No.212

３３年連続で死因トップは“がん”

３大生活習慣病が全体の54%占める

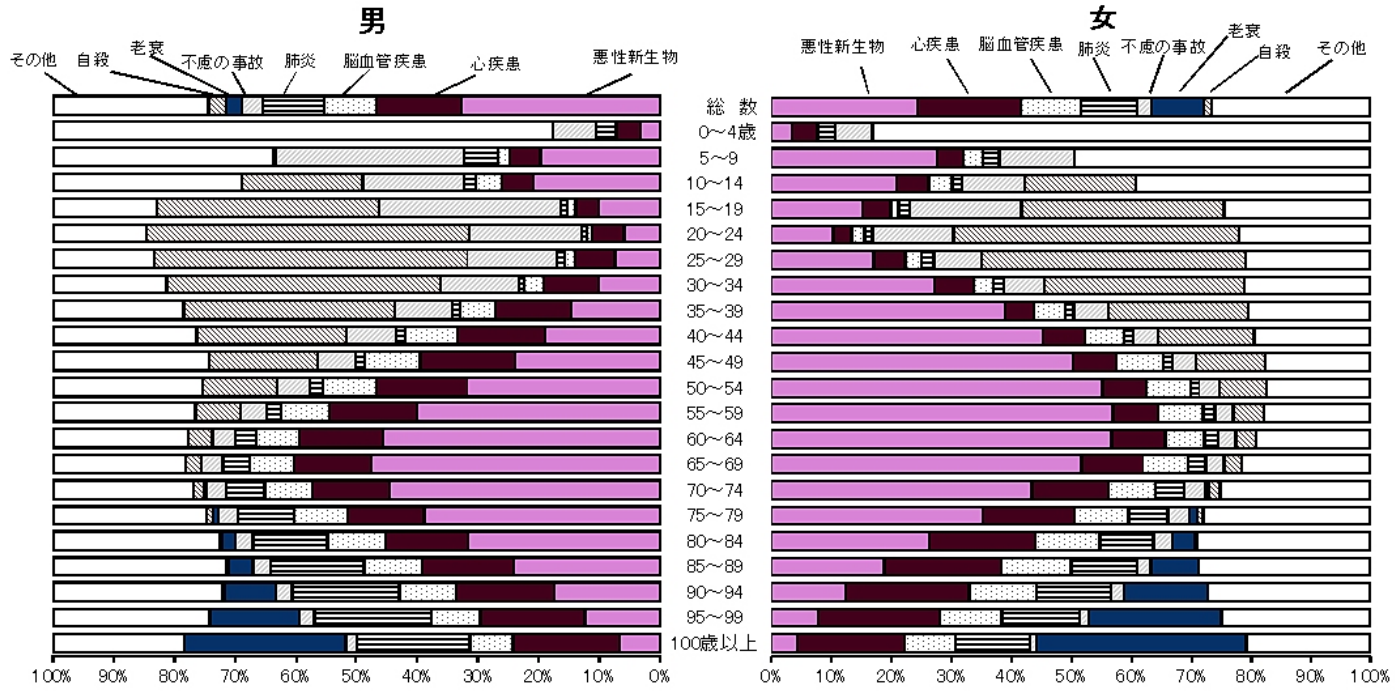
がん、脳卒中、心臓病は３大生活習慣病と言われます。生活習慣病は、不健全な生活の積み重ねによる内臓脂肪型肥満が原因となって引き起こされ、適度な運動、バランスの取れた食生活、禁煙を実践することによって予防ができるとされています。

厚生労働省の「平成25年　人口動態統計月報年計（概数）」によると、平成25年の死亡数は126万8,432人で、前年より1万2,073人増加し、死亡率（人口千対）は10.1で、前年の10.0を上回りました。

死因順位の第１位は、33年連続で悪性新生物（がん）で、以下、第２位は心疾患、第４位は脳血管疾患で、これら３大死因が全死亡者に占める割合は53.6%を占めます。

死因を性・年齢（５歳階級）別に構成割合でみると、５～９歳では不慮の事故及び悪性新生物、10～14際では悪性新生物及び自殺、15～29歳では自殺及び不慮の事故が多く、30～49歳では悪性新生物及び自殺が多くなっています。年齢が高くなるにしたがって、悪性新生物の占める割合が多くなり、男性では65～69歳で、女性では55～59歳でピークとなります。それ以降は男女とも心疾患、脳血管疾患、肺炎の占める割合が、年齢が高くなるとともに多くなっています。男性では90歳代で肺炎が最も多く、女性では85歳～99歳で心疾患、95～99歳で老衰が最も多くなります。100歳以上では男女ともに老衰が最も多くなっています。

悪性新生物は、働き盛りの年代から多くなり、中高年でピークとなります。やはり、最も怖い病気といえますが、医療技術の発達により、早期発見できれば治る可能性はぐんと高くなります。面倒だと言わずに、定期的にがん検診を受けることをお勧めします。

性・年齢階級別にみた主な死因の構成割合

厚生労働省「平成25年 人口動態統計月報年計（概数）」